

## 聖学院の歴史と精神

——大学創立三〇周年を前に

菊 地 順

\* これは、二〇一八年一月八日に開催された聖学院大学新年教職員研修会で講演したものを文章化したものです。なお、ここで述べられていることは、基本的にはすべてすでに刊行されている聖学院諸学校の記念誌や雑誌および個人誌などに記されているものをまとめたものです。そのため、個々の内容についての歴史的検証や神学的考察は行われていません。また表記もそれぞれの時代のをそのまま用いています。

### 一 聖学院の歴史と精神

(一) デイサイプルス派の歴史——クリスチャン・チャーチ (Christian Church) とデイサイプルス・オブ・クライスト (Disciples of Christ) との合同

\* 以下の記述は、秋山操編著『基督教会（デイサイプルス）史』（一九七三年）第一章に基づきます。

学校法人聖学院の背景をなすキリスト教の教派は、Christian Church (Disciples of Christ) というのが原名です。

以前は、Disciples of Christ とか、Christian Churches とか、Churches of Christ とか随意に使用され、一時公式に Christian Churches (Disciples of Christ) の名称が使用されましたが (Churches と複数形)、一九六八年の年会で、初めに表記した名称となりました (二頁)。そのため、日本では、長い間「基督教会」と表記されてきましたが、ここでは「ディサイプルス派」と表記します。以下、まず、そのおおよその経緯についてお話しします。

ディサイプルス派は、一八三〇年代に、アメリカで二つのグループが合同することによって誕生した教派です。その一つグループを代表するのが長老派教会牧師バートン・W・ストーン (Barton W. Stone, 1772-1814) という人ですが、ストーンは、一八〇一 (享和元) 年、ケンタッキー州でのリバイバル運動を指導した折、同志らと共に、「救いは予定された者だけでなく万人のものである」と説教しました。しかし、この考えは長老派教会のウエストミンスター信仰告白に反するものであったため、同志の一人が訴えられ、教会裁判となります。その結果、ストーン等は、紛争の原因が信仰箇条にあると考え、長老派教会を離脱し、スプリングフィールド長老会を組織します。そして、信条そのものに反対し、信仰の基礎を新約聖書のみ置く伝道を始め、一八〇四 (文化元) 年、以下の宣言 (要約) と共に名称を「クリスチャン・チャーチ」と改めました。その後、この運動は急速に各州に拡大していき、一八一〇年、各地のクリスチャン・チャーチの教徒者たちはケンタッキー州ベデルで合同に進むことを決議します (四一六頁)。

- 「①キリストは選ばれた人々のために死に給うたというカルヴィニズムを排する。②福音を信ずる者は誰でも救われるという信仰に立つ。③ウエストミンスター信仰告白を教理とすることを排し、聖書のみに立脚する。④個々の教会の自主性を主張する。⑤教派的制約から解放されてキリストの体なる教会の大合同を希う。」

一方、もう一つのグループを代表するのが長老派教会牧師トーマス・キャンベル (Thomas Campbell, 1763-1854) という人です。キャンベルは、当初アイルランドで長老派教会の分離派 (セシーダー派) の牧師をしていましたが、一八〇七年、健康上の理由で単身渡米し、ペンシルベニア州で伝道活動を行います。しかし、その折、たまたま何年も聖餐に与っていなかった信徒に会い、早速聖餐式に招いたところ、その人がセシーダー派の人ではなかったため教団に訴えられ、結局退会を余儀なくされます。そして、その後、一八〇九 (文化六) 年に、ペンシルベニア州ワシントン郡にクリスチャン協会を設立し、以下の宣言 (要約) を発表します。なお、宣言の起草に当たり、キャンベルが語った言葉、「聖書の語るところを我らは語り、聖書の黙するところを我らは黙す」は、その後、この派の標語になりました (六一―七頁)。

「①教会は本質的に一つである。②教会には一つの憲法があるのみで、それは新約聖書それ自身である。③人間的制度を協力の土台とすることに反対する。また、教会の会員となるために要求される知識は、自分の罪の状态とイエス・キリストによる救いについての認識である。」

その後、キャンベルの家族が英国から渡米し、この陣営に加わりますが、長男のアレクサンダー (Alexander Campbell, 1788-1866) は父の運動に感動し、献身を決意します。そのこともあって、その後ワシントン・クリスチャン協会は強勢を拡大していきました。さらに、一時洗礼問題からバプテスト派に加わりますが、一八二七 (文政一〇) 年「デイサイプルス・オブ・クライスト」と名称を称え、独自の活動を展開していくことになります (八―九頁)。

そうした歩みの中、信仰の理解が互いに近いストーン派とキャンベル派は、一八三二(天保三)年に合同し、「ディサイプルス・オブ・クライスト」と名乗ることになります(所屬各機関や各教会は「クリスチャン・チャーチ」名を用いました「そのため、日本では「基督教会」を教派名としました」)(なお、この時、ケンタッキー州のクリスチャン・チャーチの大部分とオハイオ州の多くの教会は合同しましたが、他州の多くの教会は合同を拒み、別の団体を作りました)。また一八四九(嘉永二)年には、オハイオ州シンシナチでの全国大会で、米国クリスチャン伝道協会(American Christian Missionary Society)を結成し、アレクサンダー・キャンベルが会長に就任しました(九頁)。しかし、この時、保守派の中に、伝道協会をつくることは新約聖書的でないとする反対論が高まり、その結果、ディサイプルスの本流から離脱する者たちが少なからず出ました。そのため、伝道協会は財政難に陥り、宣教師を引き上げたり、組織を改組したりせざるを得なくなり、その結果、その働きは、その後誕生した外国クリスチャン伝道協会(Foreign Christian Missionary Society)に継承されることになります。これは、一八七五(明治八)年に、会長にアイザック・エレット、通信書記にアレキサンダー・マクレーンが就任して設立された伝道協会で、初めイギリス、デンマーク、トルコ、インドに宣教師を派遣しました。そして、その後日本にも派遣することになり、その結果、一八八三(明治一六)年に最初のディサイプルス派の宣教師たち、すなわちスミス宣教師夫妻とガルスト宣教師夫妻が来日することになります(一一頁)。

なお、その後ディサイプルス派は、諸教会の緩やかな連帯の中で活動を展開していき、一九三〇年一〇月には最初の世界大会をワシントンで開催します(その後五年毎に開催)(この時、女子聖学院の第二代院長の平井庸吉が日本を代表して出席しました)(二〇頁)。しかし、その歩みは、基本的に各個教会の自発的参加に依存していたため、なかなか組織だった活動を展開できない状態が長く続きました。その結果、一九六八年、激しい論争を経て、

政策立案と統制権を持つ中央機関の設立案が承認され、教派名も「クリスチャン・チャーチ（デイサイプルス・オブ・クライスト）」と定められました（それまでは、「チャーチェス」と複数形でした）。この時のアメリカでの教会数は五、八〇二、会員数は一、五九二、六〇九でした（海外の教会数と人数は省略）（この時、教会総数約八千のうち約二千が、教団という形は従来の考え方に反するとして脱会しています）（二三頁）。

## （二）デイサイプルス派の特徴と日本伝道

### 〈デイサイプルス派の特色〉

以上の歴史的経過の中でも一部触れましたが、デイサイプルス派は、主に以下の三つの信仰的特色を持っています。（以下、二二三頁）

- （1） キリスト中心、新約聖書中心主義で、ペトロの告白「あなたこそ、生ける神の子キリストです」（マタイ福音書一六・一六）以外に信条を持たない（信仰簡条を排し、教会全体の一致を目指す）。
- （2） 個人の意見の自由を重んじ、各自みずからの方法で聖書を解釈する権利を強調する（その結果、伝道組織とか礼拝でのオルガンの使用は新約聖書の教えに反するとの極端に保守的な主張をする一部のグループが、南北戦争時脱会する）。
- （3） 「万人祭司」説に立つ（牧師も信徒も等しくキリストの弟子で、信徒も洗礼「浸礼」と聖餐式を執行できる）。

### 〈デイサイプルス派の日本伝道〉

すでに触れたように、デイサイプルス派は、一九八七（明治八）年に「外国クリスチャン伝道協会」を結成しま

したが、一八八一年の年会で、伝道局より日本へ宣教師団を送るべきとの勧告を受け、一八八三(明治一六)年に、ジョージ・T・スミス(George T. Smith, 在任一八八三—一八九二)夫妻(と六歳の娘エルシー)とチャールズ・E・ガルスト(Charles E. Garst, 在任一八八三—一八九八)夫妻が日本に派遣されました。このとき、スミス宣教師は四〇歳で、すでに一〇年の牧師経験がありました(スミス宣教師は一八四三年オハイオ州に生まれ、南北戦争に従軍して負傷し捕虜となります。その後バサニー大学「アレクサンダー・キャンベルが創立した大学」で学び、一八七四年ジョセフィン・ウッドと結婚、一〇年間各地で牧会に当たりました)。またガルスト宣教師は三〇歳で、牧師としての教育は受けていませんでした(その略歴は、以下を参照)。一行は、一〇月二十九日、横浜に到着し、その後バプテスト派宣教師の世話で日本語を勉強します。そして、翌年秋田に赴きました。それは、当時まだ宣教師が入っていない地域をわざわざ選んでのことでした(「人口三千六百万の日本に一四五人の宣教師がいるが、彼らは少数の開港地か、八都市の外人居留地に集中しているということであつた。それ以外の地に住むには政府の旅券を必要とするが、バプテスト・ミッションのポート氏(J. P. Poate)は、プロテスタント宣教師の一人もない秋田に宣教の本拠をおくよう勧告し、われわれはそれを摂理と考えた」〔ガルスト夫人〕(二二—二四頁)。

#### 〈宣教師C・E・ガルスト〉

チャールズ・E・ガルストは、一八八三年に、三〇歳のとき、日本にやって来ました。ガルストは、日本に来る前は、ウェスト・ポイントというアメリカの有名な陸軍士官学校を出た軍人でしたが、しかし自ら進んで士官学校に入った人ではありませんでした。初めは、アイオワ州立大学で二年間農学を学び、その後その方面での仕事をしましたが、ある時その能力と人柄が認められて陸軍士官学校に推薦されることになったのです。当時、ガルストの

父親は医者をしていましたが、八人兄弟であつたため、経済的にあまり豊かではありませんでした。おそらく、そういうこともあつて、ガルストは一九歳で推薦されるまま士官学校に入学することになったのです。

しかし、その四年間の士官学校時代に、ガルストは二つの重大な出来事を経験します。一つは、母親の死です。母親は、アイルランドの出身で、非常に信仰心が厚く、ガルストには牧師になることを期待していました。もう一つの出来事は、宗教的信念の変化でした。ガルストは、当時さまざまに分裂していたキリスト教世界を再び一致させようという運動をしていたアイザック・エレットの呼びかけに深く共鳴するようになり、軍人として立身出世するよりも、キリストの一兵卒として、キリストと人類のために仕えたいと思うようになったのです。しかし、士官学校を卒業した者は八年間軍務に服さなければならないという規則がありましたので、ガルストは卒業後八年間軍務に服し、その間宣教師になる準備をします。そして、同じ志を持つ女性ローラ・デラニーと結婚し、一八八三年、もう一組の宣教師夫婦であるスミス夫妻と共に、日本にやってきたのです。

その後、ガルスト夫妻は、半年ほど横浜で日本語の勉強をしてから、まだ宣教師が入っていない東北の地、秋田を選んで、スミス夫妻と共にそこに赴きました。しかし、当時の秋田はまだまだ辺境の地で、古い日本の風習がそのまま残っていた地域でしたので、多くの苦労を経験しました。人々からは好奇の目で見られ、また難解な日本語に悪戦苦闘し、さらにキリスト教に対する偏見という大きな社会的壁にぶつかりました。そればかりか、ノミや蚊といった不衛生な環境にも苦しめられました。そして、そうした困難な生活の中で、一緒に秋田に行ったスミス宣教師の妻ジョセフィンが、その翌年、出産後に八歳の娘を残して病死するという悲劇が生じます（その後、その新しい命も亡くなりました）。しかし、そうした宣教師たちの生き様は、徐々に人々に深い感銘を与えることになり、ガルストたちの働きは次第に人々から受け入れられていったのです。そして、秋田での四年間の生活は実に実り多

いものとなりました。

その後、ガルストたちは、さらに活動の範囲を広げるために、山形県の鶴岡に移り、そこでさらに四年間活動します。そして、その後、休暇で一年間アメリカに帰りますが、一八九三年、再び家族と共に来日し、今度は東京に居を構えながら、全国を伝道して回りました。また、その間、貧しい東北の地を見ていたガルストは、キリスト教の伝道だけではなく、社会の改革が必要だと考えるようになり、政治や税制についてもしばしば重要な発言をするようになります。そして、特に税制に関しては、自ら「単税太郎」と名乗って「単税論」を唱え、税の不公平をなくすよう努力しました。また多くの政治家や社会活動家の相談役にもなりました。伊藤博文は、そうしたガルストの働きを高く評価し、「西洋は未だかつてチャールズ・E・ガルストに勝る贈物を送ったことがない」と語ったほどでした。しかし、ガルストは、そうした多忙な働きの中で次第に健康を損なっていきます。それには、秋田時代から何度か重い病に見舞われていたことも影響していました。そして一八九八年二月二十八日、日本の地で四五歳の生涯を閉じることになったのです。その後、その亡骸は、東京の青山霊園に埋葬されました。

ガルストは、感銘深い言葉をたくさん残していますが、亡くなる直前に、妻から遺言はないかと尋ねられた時、こういう言葉を残しています。それは、「My life is my message」という言葉です。その遺言が示すように、ガルストは、正にその生き様そのものを通して、日本人にキリストのメッセージを伝えた人であったと言えます。

(以上、主にL・D・ガルスト『チャールズ・E・ガルスト』『小貫山信夫訳』より)

### (三) 聖学院神学校の設立

\* 以下の記述は、『聖学院中学校高等学校百年史』(二〇〇七年)(以下『百年史』と表記)に基づく。なお、この『百年史』



も『基督教会史』に負うところ大であるが、その点については検証しない。

『百年史』によれば、「他の有力諸教派は、一八七三（明治六）年のキリシタン禁制解除以前から、宣教師を日本に送り教育活動から始めたが、わが基督教会（ディサイプルス）では日本宣教開始が遅れたうえ、二〇年間も教育活動に対して関心をもたず、それに着手したのはようやく一九〇三（明治三六）年になってからであった。それは伝道協会が弱体であったことのほか、宣教師たちが間接的な教育活動よりも直接的伝道に関心をよせていたためである。」（七頁）

上述にあるように、ディサイプルス派の学校設立は、その宣教活動と同様に、他の教派から比べると後発のものでした。その経緯について簡単に振り返ってみると、一八九三（明治二六）年に来日したハーヴェイ・ヒューゴー・ガイ（Harvey Hugo Guy、在任一八九三—一九〇七）宣教師は、一八九六（明治二九）年九月に、借家で聖書神学校を始めますが、ガルストが病気のため、伝道の第一線に立つ必要が生じ、一八九八年に閉鎖します「これが聖学院の前身と言えます」。その後、ガイは一九〇〇年に休暇で二年程帰国しますが、その間シカゴ大学とエール大学「イエール」で学び、エール大学から博士号を取得します（そのため、聖学院ではガイ宣教師のことを「ガイ博士」と呼んできました）。一方、ガイは神学校設立のための資金集めに奔走し、特に母校ドレーク大学の設立者でアイオワ州知事も務めたフランシス・ドレーク將軍から一万ドルを、またその他から献金を得ることができました（計二万ドル「当時の四万円」（七—八頁））。

ガイは、一九〇二年九月に日本に帰任し、その後石川角次郎らと神学校開校の準備を進めます（このとき、すでに中学校の設立も計画し、石川に校長になる了承を得ています）。そして、一九〇三（明治三六）年二月に、聖学

院神学校が本郷教会堂を仮校舎として設立されました（これが、聖学院の出発点となります）。校長はガイ（三三歳）で、教授は石川角次郎（三六歳）と宮崎八百吉（三九歳）でした。また同年五月には、現在の中里の土地（駒込キャンパス）を、元貴族院議員中村元雄氏の遺族から、一千坪は寄付として、残り三千坪は廉価で譲り受けることができました（この地は、椎の木がたくさん植えられていたため、「椎の木屋敷」と呼ばれていました）。この地に、一九〇四年早々に宣教師館が、また九月には本校舎が建てられました（八一九頁）。

その後、一九〇四年一〇月に聖学院夜学校が設立されます（校長Ⅱ石川角次郎）。また一九〇五年一月に女子聖学院が（院長Ⅱバーサ・クロソン）、さらに一九〇六年九月に聖学院中学校が設立されます（校長Ⅱ石川角次郎）。なお、ガイは、一九〇七年、夫人の病氣のために帰国しました（ガイは、一八七〇年、カンザス州に生まれ、アイオワ州のドレーク大学を卒業後、デイモン中央基督教会より派遣され、同じ大学出身の夫人と共に一八九三年秋東京に着任しました。当時二三歳でした。初めの七年間は、関口教会堂を建設し、そこで礼拝を守り、英語聖書講義を始めたり、また各地で伝道説教をしたり、伝道用の文書の翻訳などを行いました。その後の活動は、上記の通りです）（一二二頁）。

#### （四）聖学院の名の由来

ガイは、一九〇三年に神学校を開設した時、神学校名を多額の寄付者のドレークの名を冠して「ドレーク・バイブル・カレッジ」(Drake Bible College)と命名しますが、その後「聖学院」と命名しました（命名にはガイ、石川、宮崎が関与か）。この名前に関して、石川角次郎は、「二〇年回顧」(『すいりょう椎陵』第一〇号)で、その由来を以下のように紹介しています。

「我等は君が学園を『聖学院』と名付けた。その意義は、聖なる学院ではなく聖学の院である。聖学とは聖人の学である。聖人の学とは、聖人の教を学ぶばかりでなく、学んで聖人となるのである。されば本校の理想は聖人を養成することである。」

「『心の欲する所に従つて矩を踰えず』『孔子』というのが、修得の極致で、聖人の聖人たる所以である。小我と大我の合致である。学校修身に謂ふ所の『自我完成』である。キリストの謂ふ『永生』である。『汝等もし常に我が言に居らば、真に我が弟子なり。また真理を知らん、而して真理は汝等に自由を得さすべし』『ヨハネ福音書八章三一―三二節』とキリストは教へられた。此自由を得たる者が聖人なのである。」

「聖学は生涯続くのである。中学は其基礎をすえるだけである。」

また第二代女子聖学院院長（現在の校長）の平井庸吉は、第二代聖学院中学校長ともなりますが、一九四〇年元旦の式辞の中で、聖学院の精神について、次のように語っています。

「聖学院精神とは何か、――聖とは真善美三者の和であり極致である。」「人に対し、仕事に対し真実であること」「すべての生徒諸君が善人になること」「総てのものはあるべきところにあれば美しい」（ロダン）。家庭において親子、夫婦、兄弟姉妹、学校において教師、生徒がその『あるべきところにあれば美しい』「この聖学院精神は何人が構成するのか。それは一、教職員、二、生徒、三、卒業生の三者の協心協力による外ない。」「聖学院精神の基礎はキリスト教精神である――「それは」敬神奉仕であり、十字架の精神である。」

こうした聖学院の精神は、聖学院中学校校歌（作詞Ⅱ由木康、作曲Ⅱ大沢寿人、一九三六年制定）第三節にも謳

われています。

「こゝにて学ぶ 真・善・美／ひとつの聖に すべくくりて／神と人にと きゝげつくす／これぞ我等の 尊  
き使命／聖学院 聖学院 聖学院」

ところで、なぜ「聖」学院と名付けられたかについては、資料としては、現段階では十分明確に辿ることはできません（名前をめぐる議論は、資料としては見当たりません）。ただ、推測として、時代的背景があつたのではないかと言われています。すなわち、一九世紀後期から二〇世紀初期にかけ、「聖」について議論がドイツを中心に盛んになります（ルドルフ・オットー『聖なるもの』一九一七年など）、そうした議論がガイに影響を与えたのではないかと推察されています。

（以上、一三～一九頁）

## 二 石川角次郎Ⅱ聖学院精神の具現者、基督教教育者

以上、聖学院の歴史とその精神について、その基本的なところを見てきましたが、次に、その精神を具現化した人として、石川角次郎について紹介したいと思います。

\* なお、以下の記述は、石川清著『伯父石川角次郎』（一九七二「昭和四七」年）（非売品）他による。なお、『百年史』にも同様の記述があるが、改めて石川清著に当たり執筆する。

(一) 角次郎の生涯(一)——教育者となるまで

石川家は、下野国足利の旧家で、先祖は「清和源氏の流れ」だと言われています。また、「私(清)の曾祖父の時代には石川本家は足利の富豪であった」そうです。

角次郎の父清三郎は、栃木県足利市で「何十人かの人を使つて手広く染物紺屋こうやを営んでいた」「熱心な神道の信者」で、性格は「暴君적であり且つ頗る派手好みの性格」であつたとのこと。しかし、家業は後、不振に陥ります(輸入染料に押されたのが一因とのこと)。

母和歌子は、栃木県佐野市の旧家の出身で、「非常に堅実且つ進歩的な賢婦人」で、「子女の教育に熱心」であつたそうです(長男角次郎は東京に遊学し、長女愛は高木信吉牧師と結婚。次男庄三郎は家業を継ぎ、四男林四郎は東京帝国大学を卒業し英語学者へ。次女貞子は村山敏雄牧師と結婚)。

角次郎は、清次郎の長男として慶応三(一八六七)年七月三日、下野国足利(栃木県足利市)に生まれました。幼時は病弱でしたが、性格は生来温厚円満で、学業操行共に優等であつたそうです。

角次郎は、明治一四(一八八一)年一月、足利高等小学校を卒業後、翌年一月まで足利私立共立学舎で漢学を学びます。その後上京し、同年二月東京私立共立学校に入学します。そして明治一七(一八八四)年七月同校を卒業し、東京帝国大学予備門に入学しました(一七歳)。

この時期、角次郎は、神田佐久間町で英語塾を開いていた牧師の高木信吉のところに通つた関係から、「高木牧師の指導及び故植村正久先生等の感化に寄り」(佐伯\*, 七九頁)、共立学校時代に入信しました(高木宅で受洗「滴礼」。受洗日は不明「明治一六年秋」)。この時の思いを、「自分が最近入信した基督教こそ実に救国の大義と確信する」(友人への手紙)と語っています。その後(明治一六年)、帰省した折に父母にキリスト教を伝道しますが、そ

の時は父親の激怒を買っています（しかし、後に父母とも入信しました）。また妹愛を高木牧師に嫁がせました。

\* 佐伯好郎＝角次郎の親友で、東京高等工業学校（現東京工業大学）、第五高等学校、台湾総督府中学校等で教鞭を執った人です。角次郎の校葬では、その「略歴」を語っています。

その後、角次郎は、東京帝国大学予備門において、東京帝国大学総長の加藤弘之博士の基督教反対論に会い、また基督教界においても博士に反駁する者がいなかったことを嘆き、米国への留学を決意します。清によれば、「茲に於て伯父は米国に渡り基督教の奥義を窮めんものと決意した」のです。そして、父親を説得し（その結果、次弟庄次郎が家業を継ぐことになります）、また学費の工面も得ることができました（群馬県桐生の富豪大沢福太郎から借用しました）。

佐伯は、この時の角次郎の心情について、以下のように語っています。「明治二〇年の春に至り先生「角次郎」の一生涯に一種の内部革命が起こりました。それは先生が聖書の研究に没頭し<sup>おわ</sup>了り俄然として其素志を變更し法律学の研究を断念し『人を治むるの学問』を捨てて『心を治むるの学問』即ち『人を救うべき道』に<sup>は</sup>奔るに至りたることです。」（佐伯、七九頁）。また、こうも語っています。「先生は当時大いに新島襄先生に私淑するところがありました。故に京都の同志社に入りて専心に神学を研究せんとも考えて居られたのですが某先輩の止むるところとなりまして同志社に行くことを中止せられました。その時高木牧師や同郷の素封家にして多年石川先生の前途に囑望して居られた大沢氏の奨励と援助とを得て断然米国に遊学せらるることとなりました。これが明治二〇年三月のことです。」（佐伯、八〇頁）

角次郎は、明治二〇（一八八七）年三月、横浜港から渡米しました（この時、植村正久も見送りに来ています）。

そして、同年五月から明治二二（一八八九）年三月まで、サンフランシスコの私立「ユニバシティ・カレッジ」で英文学、ラテン語、ギリシア語を学びます。また同年五月から同二四（一八九一）年三月まで、オハイオ州立大学で英文学とドイツ語を学びます。さらに同年四月から翌年三月まで、サンフランシスコの日本人会英語学校で教授の傍ら個人について英作文と英文朗読法を学びます。そして、同二五（一八九二）年四月、帰朝しました（なお、明治四二―四三年、再遊しています）。

この留学の期間に、角次郎は、デイスайプルス派牧師 W・K・アズビル (Ashill) から浸礼による洗礼を受け、デイスайプルス派に属するキリスト者となります。佐伯によりますと、「英文学、古典学等の外に基督教の理論と実際とに関して深く研究——従つて聖書に関しても教会政治に関しても将又はたまたバプテスマ等の教理に関しても一家の見識を具有せらるるに至りましたので、終に同志の師アビズル先生の指導によりて当教会の重要な一会員となりました。」（佐伯、八〇頁）。

### （二）角次郎の生涯（2）——聖学院に関わるまで

アメリカから帰国した角次郎は、明治二五（一八九二）年九月から同二九年五月まで、東京府立学舎・東京専門学校（早稲田大学の前身）、明治女学院、国民英学会等で、英語学及び英文学を教授します。中でも、明治女学院では、明治二六年頃から辞職した二九年まで、三年余り奉職します。このとき、その教師陣には、島崎藤村、北村透谷、巖本善治などがいました。

この時期、角次郎は、弟林四郎と妹貞を自宅に引き取り教育しています。その後、貞は明治女学校に入学し、明治三〇年に卒業しました（後に牧師村山敏雄と結婚）。また角次郎の妻となる富田八重は、明治二六年七月明治女

学校の高等科を卒業し、その後母校の教師となっています。

そうした中、明治二九（一八九六）年二月五日午前二時半、隣家からの出火で明治女学院が類焼します。そのとき、校長の巖本善治一家は角次郎宅に避難しましたが、その後間もなくして（二月一〇日）巖本夫人の甲子<sup>かし</sup>が三三歳で病死します（甲子は、『若松しづ子（賤子）』のペンネームで『小公子』の訳者として知られた人です。バイオリニスト巖本真理は孫娘に当たります）。その葬儀で、角次郎は司式を担当しました。

同年五月、角次郎は、岡山県立尋常中学校の教師となります（後に事務主任と舎監も兼ねます）。岡山は富田八重の郷里で、八重は富田家の一人娘でした。そのため、後、生まれた男児に富田家を嗣がせるとの了解で結婚します（そのため、角次郎の次男領之助は富田姓を名乗ることになりました）。二人の結婚は、明治三〇年乃至三一年ごろで（明確な記録がない）、兩人が共に三〇歳のときでした（結婚届は同三年に提出）。このとき、島崎藤村が詩を贈呈しています。

その後、角次郎は、明治三〇（一八九七）年九月一日付で学習院囑託となり、同年十一月二五日付で同教授となります（同三六年四月二七日まで）（同院の英語主任斉藤恒太郎が角次郎の好評を耳にし、推薦したと言われています）。この人事に関して、清は、学習院長の近衛篤磨公爵（近衛文磨の父）が、「学習院の旧弊を打破せんとして優秀な教育者を広く野に求めたが、その撰に当たった一人が角次郎伯父であつた」と記しています。

そうした歩みの中で、角次郎は、H・H・ガイと知り合い、その「人格及び主張に共感し肝胆相照らした」仲となります。そのとき、二人は、日本伝道の方針に関して、「真つ向から基督教を振りかざすよりも、内に基督を蔵し基督教精神で広く世に働きかけた方が適當である」との点で大いに共感したと言われています（そのため、後、聖学院夜学校でも聖学院中学校でも聖書を必須科目とはしませんでした。逆にそのため「中学校」と称することが



できました。聖書を科目に入れた青山学院他は「中学部又は普通部」と称しました。その後、角次郎は、ガイより招かれて学習院を辞し、一九〇二年に聖学院神学校の教授となり、また一九〇三年には聖学院夜学校の校長に、そして一九〇六年には聖学院中学校の校長となりました。

### (三) 角次郎の生涯(3) —— キリスト教教育者としての歩み

甥の清は、角次郎の教育者としての姿について、以下のように語っています。

「伯父の一生を要約すれば基督教教育者ということが出来ると思う。即ち教育しながら基督教を伝道したのである。その日常坐臥その儘が基督教の伝道であつた。」「所属の教会で説教や基督教講演をしたことは勿論であるが、それよりも伯父の特色は談笑の合間に諄々として神を説き基督教を教えることであつた。」

これは、角次郎がガイと深く共感し合つた伝道の仕方を、角次郎がそのまま実践したことを物語るものです。また、伝道する内容も日本古来の思想との関連において宣べ伝えるべきことを語っていたといえます。その点について、佐伯は以下のように証言しています。

「日本人として日本の同胞に福音を説くには日本思想に立脚せねばならない。東洋思想の根源たる釋・老・儒の三教は勿論、日本固有の国民的思想を基礎として日本人としてのキリスト觀を説かねばならぬとは石川先生の主張であつた。而して東洋思想と云うものを以て日本のキリスト教に対しては一種の旧約であるとして極めて自由にして而かも極めて保守的の神学上の立場に在つてキリスト教の伝道に従事せんとして、先ずその準備を成さんとして漸次身を教育界に投じた」(佐伯、八一頁)(＊新渡戸稲造『武士道』にも同様の主張がありま

す)

また甥の清も、これと関連する、以下のような証言をしている。

「聖学院夜学校に於て、また聖学院中学校に於て、前後五年間、伯父の生徒として親しくその薫陶を受けた――。伯父はその特徴の温顔を以て教室に臨み、時々ジョークを混えて、兎角乾燥無味に陥り易い修身の時間を倦<sup>あ</sup>きさせることが無かった。伯父の説くところは、常に教育勅語を引用して良心を強調した。本当は神を説きたいところであつたのであろうが、敢えて良心と言つたところに深い意味があつたのだと思う。」

このように、角次郎は、一人のキリスト者として（牧師ではなかった）、日常の教育の現場において、その人格的な交わりを通して、また日本の伝統を尊重しつつ、キリストの福音を若い生徒たちに伝えることを使命としたのです。そこに、キリスト教教育者としての角次郎の神髄を見ることができるようになります。角次郎は、一教育者であると共に一キリスト者として、まさにキリストの弟子としてその生涯を歩んだのです。そうした歩みにおいて、甥の清は、角次郎の「終生の念願」は基督伝を書くことであつたと回顧しています。すなわち、「伯父の終生の念願は、日本人としての基督伝を書くことであつた」。しかし、これは残念ながら実現することはありませんでした。その経緯について、清は、「米国伝道会社に於ても、昭和五年「一九三〇年」に、一つには彼の功績に酬い、二つにはその基督伝研究を援けるため、聖地パレスチナ訪問と欧米視察とのため一カ年の賜暇を決定した」ことを報告していますが、残念ながら、角次郎の死によって、それは実現することはありませんでした。

#### (四) 角次郎の生涯(4) —— その死

角次郎は、昭和五(一九三〇)年一〇月二五日、隔週出張伝道に行っていた千葉県勝浦町の基督教会から帰宅後、病(肝臓癌の末期)で倒れます。しかし、一〇月三〇日、教育勅語下賜四〇年記念日に病苦を押して出校し、訓話をして帰宅します。しかし、その後「再び起つことは出来なかった」のです。そして、二ヶ月後の一二月二九日、天に召されました。享年六三歳でした。一二月三一日に滝野川教会で仮葬儀が行われ、その後多摩墓地に埋葬されます。そして、翌年の昭和六年一月一日に、聖学院にて、校葬として葬儀が執り行われました。

この葬儀に参列したガイは、追悼の言葉を述べていますが、以下、その抜粋を紹介します(ガイは、この時期、たまたまアメリカの社会宗教調査会の団長として来日していました)。

「石川角次郎先生は、この「人生の」諸問題の中に能く働き努力し働き、その生命を惜しまず解決の犠牲となつて、深く世渡りを完うした甚だ稀な御方であります。」

「彼は」科学、哲学、神学の指導に従い、之等のあらん限りの助けを求めて、人生の諸問題の解決を図る研究を致しました。勿論彼の確信信頼が他の更に深い更に堅固なる基礎の上に建てられてあつた事は明らかな事実であります。」

「石川先生は本当の愛国者でありました。——其の有望なる将来を信じ、満腔まんかうの誠心を以て其の成功、其の栄えを常に祈つて居つた処の方であります。——「日本の自然を愛し」そして其の中心的文化を奨励し、——人に教えたのであります。」

「石川先生は日本人種を愛した御方であります。——「また」天下の万民は兄弟であるという信念の下に、決

して狭隘な愛国心でない大きな心を有ち、他の人種を見下げるような事は致しませんでした。」

「石川先生は日本に在る宗教を重んじた方でありました。——仏教、神教、儒教はこれは東洋に於ける旧約聖書であると度々申されて居りました。斯るが故に基督教が日本に来たことは、之等の諸宗教に對して其の足らざる所を完うする為である。古来の宗教——を保持し、之を補つて将来現われんとする文化に貢獻することは基督教信者の免れ得ない責任であると始終堅く信じて居られました。」

「石川先生は聖書を信ずる方であります。人生に欠くべからざる常道は新約聖書に於いてのみ発見し得るものであると信じて居た方であります。」

「石川先生はキリストの弟子である。——キリストの氣高い御人格に感化を蒙つて其の行ないの通りに働かれた御方であります。『吾れを強くし給うものによりて、總ての事を為し得るものなり』〔ピリピ四・一三〕と何時も申され、心からそう信じて居られたのであります。基督教の為に總ての時と宝とを捧げて己の生命を顧みるに足らざるものとし唯々キリストの御心を心として、其の精霊と融和して『吾れ生くるに非ず、キリスト吾れの中にあつて生くるなり』〔ガラテヤ二・二〇〕と言つて居られました。従つて彼の宗教は言葉の宗教ではなく、理屈の宗教でなく、生命の宗教、行いの宗教でありました。『人は汝等の善き行ないを見て汝等の天に在す父を拝むべし』〔マタイ五・一六〕とキリストの御詞の通りに信じていられました。即ち実行を宗教によつて示し、他を感化し指導したのであります。」

このガイの一文に、角次郎のキリスト教教育者としての姿が余すところなく述べられているように思います。そして、その姿に、わたしたちは聖学院教育の具現者としての石川角次郎を見て取ることができるのではないでしょう。

うか。

(五) 角次郎の言葉(資料として)

角次郎は、自身に関しては、大変謙虚な人であったと言えます。角次郎には、自分に関して書き残したものはほとんど見当たりません。それは、結婚式の正確な日時もわからないほどです。また、説教以外では公式の文章もあまり見当たりません。しかし、幸い、聖学院中学校が発行した校友会雑誌には、しばしば寄稿しています(ただ短いものもあります)。そこで、その一覽を以下に紹介します。また、特筆すべき内容については、抜粋して紹介しておきます。なお、この雑誌は、第八号より「すいりょう 椎陵」という名称になりました。

・校友会雑誌第一号(聖学院中学校校友会、明治四三「一九〇〇」年七月発行)

講演「人格の印象」——「帰結として言いたい事は、吾等人間に最も大切な事は、各自の人格「キャラクター」を出来るだけ立派に作り上げる事である。而して、人格を養成する最良法は、高潔なる古今の人格と、出来るだけ多く接触し得らるゝ様に、身を処する事である。」

・校友会雑誌第三号、創立一〇周年記念(大正五「一九一六」年六月発行)

告辞(第七回卒業式での告辞)——「次の三事を忘れてはならぬ。先ず最も肝要なることは、成功の真意義である。人間の活動の目的は、人格の養成及び其發揮である。——故に諸君の価値は「何を為したか」ではなし「如何に為したか」で定まるのである。——「何を」は、自分で勝手に選ぶ訳には往かぬけれど、「如何に」は、自分の態度だから勝手に定められる。此に真の自由があり、真の独立自守がある」。「然らば如何なる態度を取るべきか。

——最も大切な二点を語ろう。第一は『ベストを尽す』という事である。——更に大事な事は、『公明正大』という事である。」

・校友会雑誌第四号（大正七年四月発行）

講壇「憂国者イエス」

・校友会雑誌第五号（大正一〇「一九二二」年一二月発行）

講壇「平理安<sup>ベリアン</sup>会に就て」——「ベリアンとは、ベリア人の義にて、（使徒言行録一七章一一―一二節）『ベリアンの人々は——善良にして——日々聖書をしらぶ。』とある所から取つたので、『聖書の忠実なる研究者』という意味を含ませている」——『ベリアン』に対して『平理安』の三字が選ばれた。音は少し無理の様だが、字の意義が面白い。平安プラス理で、『合理的平安』の意となる。——キリストが、最後に弟子等と別るゝに臨み、『われ平安を汝等に遺す。我が平安を汝等に与う。——』『ヨハネ一四・二七』と言われた。其の平安は、即ち合理的平安である。世の与うるは、『実利』に由る平安である。キリストの与うるは、『真理』に由る平安である。彼は『平理安』で、是は『平理安』である。」

・校友会雑誌第六号（大正一二「一九二三」年三月発行）

論説「三徳老師」——「是は本来『三徳老師』というのが正当で、サンタクロウスというのは其訛りではないか」「老師は三個の不思議な徳を具へて居る——第一。老師は——未だ曾て乏きを告げた事がない。——天の富は、使へば使ふほど殖えるのであるから、惜みなく与えられる訳である。——第二。老師は始めより老人であるが、あれ以上には年を取らぬ——老師はこの『永遠の生命』を有つて居るのである。——第三。老師は定まつた住所がない様である。——老師も多分天に安宅を有し——何時でも何処へでも出て行かれるのであろう。」

- ・校友会雑誌第七号（大正一三「一九二四」年三月発行）  
論説「天譴論」——『天譴』は『天のいましめ』であって、『天罰』ではない。——今度の震災災「関東大震災（一九二三年九月一日）」の被害者は、国家的大天譴の犠牲者である。或る意味に於ては国民の罪に代わつたのである。」
- ・校友会雑誌「椎陵」第八号（大正一四年二月発行）  
講壇「権威ある教」
- ・校友会雑誌「椎陵」第九号（大正一五年三月発行）  
講壇「物的美と靈的美」
- ・学友会雑誌「椎陵」第一〇号（昭和二年二月発行）  
論壇「二十年の回顧」——「此日」二月三日（天長節）を聖別して創立記念日とし、明治天皇の御盛徳を偲びつゝ、——校友会の総会を催すことゝしたのである。「本校の生徒定員を、全校二〇〇名一学級平均四〇名とした。——生徒の個性に応じて、成るべく個人的に教育するを可とする故、二〇〇名でも多過ぎる位だ。——学校の経営からいへば、得策ではないが、訓育の上から見れば、大いに宜しい。」教師生徒一団となり、共に神に祈り、共に聖書を学び、共にキリストの為に働かんとするのである。「人格教育を施すには、学課時間外に教師と生徒と接触する必要がある。」
- ・「椎陵」第二二号（昭和四「一九二九」年三月発行）  
講壇「教学の基礎」——「教学の基礎は「自己を知る」ことである」「自己を知る第一歩は、個性というもののあつたことを知ることである」「次には、自己の位置を知れ」「次には、自己の天分を知れ」「次には、自己の使命を知れ」

・「椎陵」第二三号（昭和五年三月発行）

講壇「維新興国の指導精神」

\* 「椎陵」は第二〇号（昭和一二「一九三七」年六月発行）でもって終了しました。

#### 四 大学の理念——近藤勝彦理事（一九八七年当時）の講演

\* 「聖学院の理念」（女子聖学院短期大学『キリスト教と諸学』Vol. 2、一九八七年）より

〈「プロテスタント文化大学」としての聖学院大学〉

この講演では、何よりもまず、聖学院大学は、日本国憲法と教育基本法との枠内で、キリスト教大学の形成を目指すことが語られています。これは、聖学院大学の社会的枠組みを明言したものと言えます。

次に語られていることは、聖学院大学は「教派立」の大学ではないということです。以上で見えてきたように、歴史的には、聖学院大学はデイサイプルス派（クリスチャン・チャーチ）の伝統に属しますが、その教派性を押し立てて建てられた大学ではありません。それを尊重しながらも、広くプロテスタントの伝統に立つ大学として建てられました（デイサイプルス派自身、教派主義の克服を目指すことを主眼として創始されました）。しかも、近現代世界に対するプロテスタンティズムの責任を深く自覚する中で、その責任を負うべく設立されたのが聖学院大学です。すなわち、「プロテスタント・キリスト教（プロテスタンティズム）の遺産を現代において新しく生かし、現代社会の危機に立ち向かい、現代社会の新生（リニューアル）のために為すところがある」との思いで建てられま



した。

その意味では、聖学院大学は、カトリック大学としての上智大学を意識して設立されたとも言えます。そのため、以下で見るように、「プロテスタント文化大学」を目指す聖学院大学は、「プロテスタント神学大学」としての東京神学大学とも異なります（歴史的には、聖学院神学校は青山学院大学神学部と合流し、その後青山学院大学神学部は東京神学大学に合流しましたので、そこには継続があります）。

それでは、「プロテスタント文化大学」とは何かと言いますと、それはプロテスタント・キリスト教の精神に基づく「教育と研究」、すなわち「人格形成と文化形成」を主軸とする大学であるということです。もう少し具体的に言えば、「超越的なものの文化への突入」と「プロテスタント的な超越次元の特質の経験（捉え方）」の中で、（聖俗二元論とは異なる）「ダイナミックな文化と超越との緊張関係」による批判と創造を通して、「人間と文化の回心（メタノイア）と変革（トランスフォーメーション）」を探索するものです。そして、そこには、「垂直次元と水平次元との文化総合」としての文化形成と、「キリスト教をもって現代社会と人間の問題に立ち向かっていく献身者」の育成という人格形成とが目指されています。